

『モーツァルトは子守唄を歌わない』 森雅裕

大洗藍司

まず断っておかねばならない。本書はおちゃらけである。ハードボイルドと言う人もいよう。確かにベートーヴェンの生き様——自分の生活態度を曲げず、頑固、偏屈、意固地——はハードボイルドだろうが、小説自体は（おちゃらけ）で（お笑い）である。

でも第三十一回の乱歩賞受賞作。死因不明で墓の場所さえ確定できないモーツァルトの死を、ベートーヴェンが弟子のチェルニーと共に追う。登場する有名人はこの三人にとどまらず、サリエリ、シカネーダ、シューベルトと多彩である。もっとも私は、サリエリやスウィーテン男爵の名は、映画『アマデウス』で初めて知ったのだが。

著者の『推理小説常習犯』によると、本書執筆中に米国でモーツァルトの死にまつわる音楽映画が封切られたという噂を聞き、でも音楽映画がヒットしたためしはないと気楽に考えていたところアカデミー賞を総なめ、乱歩賞に応募する頃には日本でも公開されて大ヒット。現に乱歩賞の選考会でも「もの真似」との批判が出たらしい。

それでも受賞したことからわかるとおり、本書と映画は全く違う。時期が違うし、主人公も違う。主旨も、映画はモーツァルトとサリエリの生き様を描いているのに対して、本書は推理小説で、推理でもって死因を暴いていく。もちろん死因も違う。ま、映画のやり方では殺人罪にはなるまいから、推理小説としては成り立たないが。

モーツァルトの死因は諸説ある。フリーメーソンによる殺害説、サリエリ犯人説、毒殺説、水銀中毒説、等々。でも本書ほどスケールの大きい殺害理由はあるまい。そのぶん現実味には乏しい気もするが、だからこそ推理小説として楽しめるといえるもの。

キャラクター設定も素晴らしい。ベートーヴェンはもちろんのこと、チェルニーが秀逸。小生意気ながら利発で、師匠ベートーヴェンとの掛け合い漫才が何とも楽しい。

なお、短編集『ベートーヴェンな憂鬱症』もお薦め。

〈出版〉講談社文庫

〈本文文字数〉七九〇字

『邪馬台国はどこですか?』 鯨統一郎

大洗藍司

「このミステリーがすごい」に選ばれ話題になったので、読まれた方も多いだろう。

〈とんでも本〉と言ってもいい。奇想天外な解釈と言うより、無謀な暴論でもって歴史の見方を変える。例えば、お釈迦様は悟りを開いておらず、王家の出でもなく、出家の理由は……。本能寺の変は、織田信長の……。だった。幕末期の江戸城明け渡しによって無血に終わらせられたのは、勝海舟が相手方に……。をしたから。などなど。(ちなみに……。はネタバレになるので伏せた部分)

馬鹿馬鹿しいと考えるか、楽しいと思うか。要はお気楽に読めば良いと言うこと。

その中で、表題作「邪馬台国はどこですか」は、本当に光っている。

邪馬台国の存在を知らせるのは、唯一中国の魏志倭人伝のみだが、この記事どおりならば邪馬台国は海の中に存在することになってしまう。即ち、何処かに記述ミスもしくは勘違いがあるわけで、その正し方によって畿内説と九州説が生まれる。本編では、何処をミスや勘違いと読むかを説明し、それによって邪馬台国の場所を特定する。これが、またぶっ飛ぶ。明かす訳にはいかないが、ま、東北地方とだけは言っておこう。

ミステリの形式を取るだけあって、楽しく読み進めながら、歴史を知ることができる。舞台はバー。そこに呑みに来る日本史の重鎮学者と弟子である美貌の新鋭学者は、歴史を常識に沿って解釈するが、雑誌ライターらしき三十男が新説でもって常識をうち砕く。特に美学者と男の掛け合いが楽しく、笑いながら読み進められる。

邪馬台国の話に戻るが、私は常々、邪馬台国の場所にはそれにふさわしい地名が残っているはずだと考えている。だが残念ながら、畿内説も九州説も、邪馬台という名前と地名がリンクしていない。で、本編だが、これが見事にリンクしている。一般的にはお笑い系のトンデモ説と取られようが、私は〈新説〉ではなく〈真説〉ではなからうかと思っっているのだが、果たして……

〈出版〉創元推理文庫

〈本文文字数〉七九八字

余談

本書の数年前に『新説邪馬台国の謎殺人事件』(荒巻義雄)という本が出版されています。あまり売れなかったようですが(文庫になったくらいだから、そこそこは売れたのか?)

鯨統一郎が書店勤務していたとき、客から「邪馬台国はどこですか?」と問われたそう。彼は「畿内説と九州説があつて……」と説明したそうですが、客は邪馬台国論議をしに本屋に来たわけではなく、『新説邪馬台国の謎殺人事件』が何処に置いてあるのか尋ねたわけです。この失敗談をもとに、本書の題名を決めたそうです。

人から聞いた話なので、どこまで本当だかわかりませんが。